

RPK2017 報告

熊野真規子/上野由加里/高木雄基/野口実里/折井伸之輔/藤谷 悠



2017.3.27-3.28 に大阪・梅田の上田安子服飾専門学校で開催された第 31 回 [Rencontres Pedagogiques du Kansai](#)(関西フランス語教育研究会)に弘前大学学生 2 名、慶應義塾大学 SFC 学生 3 名と参加し、2016 年度の「弘前×フランス」プロジェクトについて報告しました。学生は、大学間交流の予備調査で訪れた宮城学院クリスマスマーケットのアトリエでも、ゲストスピーカーをつとめました。(資料として、2 ページ目以降に予稿集の発表要旨と学生の報告書を添付します)。

アトリエの発表タイトル

・2016 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel « Hirosaki×France »

タイムテーブル: 3/25(金)15:20-16:40

参加したアトリエ

・Pour la survie / フランス語教育: 生き残りのために

・フランス語初学者に有効な手段としての仏検と教科書(三修社)

DAPF et les manuels comme un moyen efficace pour les débutants français

・学校をまつりの場に～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin : pour créer un lieu de formation et de rencontre

・異文化間教育と授業実践 Interculturel et pratiques en classe ★

・日本式 FLE は可能か? Comment adapter le FLE au statu quo japonais ?

・学生×教師: 対話(エシヤンジュ)フランス語学習と向き合う

・教室におけるアクティヴ・リーディング La lecture active en classe



(熊野真規子)

2016 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel« Hirosaki×France »

熊野 真規子／学生（高木・上野、藤谷・折井・野口）

KUMANO Makiko / étudiants de Hirosaki et de Keio

(TAKAGI・

UENO, FUJITANI・ORII・NOGUCHI)

弘前大学

kumano ? hirosaki-u.ac.jp

「弘前×フランス」プロジェクトのこれから：引き算作業

実社会の「リアルな場」での主体的学生活動を、教育プログラム化すべく試行して2年、社会実験的に「マルシェ」を中心としたまちなかでのイベントをしかけて3年、フランスでのイベントも3年度にわたって実施してきた。まちづくり・地域貢献、キャリア教育的な側面で一定の成果をあげつつも、特に「持続可能性」については、さまざまな課題が見えてきた。

そこで、これまでのランコントロールやフランス語教育学会での発表ではできなかった「負担になりすぎず、持続していける形」のプロジェクトの展望を「引き算」を中心に議論し、この欲ばり過ぎるプロジェクトで残すべき本質的な部分を再考する機会にしたいと思う。

アトリエ参加者の引き算に向けてのアイデア、報告する学生を活用した質問（こういうことを計画している、あるいは、いつかこういうことを試してみたいが、どう思うか）などのやりとりを通じて、それぞれの教育現場、地域にあった多言語教育・多文化教育の方法を探る場としてぜひ利用していただければと思う。

今回のアトリエでは、教員（熊野）と、プロジェクトに参画してきた弘前大学の学生（「弘前グローバル・アクション」）、プロジェクトを通じて交流している慶應義塾大学國枝研究会の学生で同等の持ち時間の報告をし、議論の時間を最低30分は確保したいと思っている。

- ・熊野：プロジェクト全体の概要、持続可能性についての課題など 10分
- ・「弘前グローバル・アクション」からの報告 20分
- ・「國枝研究会」学生からの報告 20分
- ・ディスカッション 30分程度

学校をまつりの場に ～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin : pour créer un lieu de formation et de rencontre.

間瀬 幸江／学生（高木・上野、藤谷・折井・野口）

MASE Yukie / étudiants de Hirosaki et de Keio
(TAKAGI・UENO, FUJITANI・ORII・NOGUCHI)

宮城学院女子大学
ymase@mgu.ac.jp

宮城学院クリスマスマーケットは、巷のジングルベルやイルミネーションなどのナイーヴな商業主義的クリスマスとは一線を画し、キリスト教主義教育をうたう女子大学ならではの「ほんもののクリスマス」のイメージ創出を目指して、2014年に始まりました。ノウハウもない中、1回目は800人、2、3回目はいずれも1600人の来場者に恵まれ、地域にお住いの皆さんが家族連れで12月の日曜日の午後をゆっくりと楽しめるイベントに育ってきました。2016年12月に開催された第3回には、「弘前グローバル・アクション」のみなさんと、慶應義塾大学國枝研究室のみなさんが、オブザーバー兼スタッフとして参加しました。

過去3回のマーケットにおいて企画運営の中心は教職員でした。学生のボランティアスタッフは手足となって企画を支えました。けれども、学生一人一人が、顔の見える運営主体になってこそ、教育機関である大学でイベントを行う意義があります。このことは、「フランス文化」のブランドだけを前面に押し出した情報伝達型・一方通行型の授業よりも、学習者が互いに意思の疎通を図り、感情を言葉に乗せながら「自分のフランス」を組み上げていく、学習者中心型の授業でこそ、持続可能かつ主体的なフランス語話者が育ちやすいことと、似ています。

このアトリエではまず、宮城学院クリスマスマーケットの沿革にふれ、これが、大学ブランディングのため、大学内部にある人的・歴史的資産の可視化ならびに大学の地域貢献への要望にこたえる主旨ではじまったことをご説明します。続いて、弘前大学、慶應義塾大学の学生さんたちを交えて、イベント運営主体としての学生参画の可能性を探ります。以上2点を踏まえ、公開ディスカッションへとつなげます。

人と人のつながりを創出する主体としての学生/学習者のありかたについて、宮城学院クリスマスマーケットという地域連携イベントの具体例を用いて、アクチュアルな議論を展開できたらと思います。

Le but de cet atelier consiste, premièrement, à vous présenter le marché de Noël, événement hivernal que l'université Miyagi Gakuin a inauguré il y a trois ans et deuxièmement, à vous inviter à réfléchir sur sa meilleure organisation du point de vue pédagogique.

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2017

@上田安子服飾専門学校一大阪

2017.3.27-28 参加報告書

国際社会コース 2年 上野 由加里

1. 発表事前準備

① 目標：

伝わりやすいスライドを完成させて、練習しておく。

② 成果／課題・改善点：

発表は「わかりやすかった」と何人かの方におっしゃっていただいたので良かった。ただもう少し具体的な深い内容を伝えられれば良かったと思う。そのためにも、プロジェクトをこれからどうしたらいいかをみんなでもっと具体的に話し合う機会を発表の前に作れば良かったなと少し後悔した。

改善点としては、発表するのが二人でも、その内容をもう少しプロジェクトのみんなで考えること。そのほうがより内容の詰まった発表ができると思った。

2. アトリエ発表

・日時：3/27(月)13:45～15:05

・アトリエタイトル：

学校をまつりの場に～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin :pour créer un lieu de formation et de Rencontre



① 目標：

来場者の皆さんが聞きたい学生の生の声を伝える。

② プレゼン・発表内容：

会場の雰囲気、クリスマスマーケットの問題点、3大学交流会について

③ 成果／課題・改善点：

3大学交流会については、弘前大学生としてでなければ言えない感想などは言えたかと思う。(慶應大学っていうだけで緊張したことや、折井さんのファシリテーションがとてもうまくて緊張が解けたなど。)しかし、正直クリスマスマーケットは当日手回しオルガンで精一杯で、全体像や問題点、意見などをあまり持っていなかったため、大したことが言えなかったと思う。それに比べて慶応の人たちや他の弘前大学生は、マルシェ全体を把握し、客層や問題点などもよく考えていたこと

が分かった。特に来場者の方にインタビューなどを行っていたということに驚いた何かに参加するとき、私もそこで働いている人やお客さんなどに話を聞き、問題点を考えたりしようと思った。

④ 感想、展望など

クリスマスマーケットには参加したけれど、その目的や背景、準備の様子などは知らなかったため、改めて発表を聞いて、とてもいろんな思いがこもっていたことが分かった。やはり当日に行くだけではわからないことはたくさんあるのだと実感した。しかしその分、当日しか入ってないからこそ見えることもたくさんあることが分かったので、フランス風マルシェでも、出店者の方や外部の方の意見を聞きたいと思った。

正直フランス風マルシェと直接関係のない、他のイベントなどに参加することが私たちを忙しくしている原因の一つなので、本当に必要なのだろうかという思いがあったが、それをしたおかげで間瀬先生や宮城学院女子大学の人たちと繋がりができて、こうして一緒に発表をしたり、意見をもらったりできたということ、さらに手回しオルガンという企画を知ることができたことはとても良かったと思った。

・日時：3/27(月)15:20～16:40

・アトリエタイトル：

2016 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel

《Hirosaki×France》



① 目標：活動と課題を理解してもらえるような発表にし、何か良いアイデアを持ち帰る

② プレゼン・発表内容：

プロジェクトの活動紹介、抱えている課題

③ 成果／課題・改善点：

聞いてくださった方から「わかりやすかった」という声を聞いて嬉しかった。そして、自分たちが思っているより周りから見てこのプロジェクトは注目されていることが分かった。さらにこの発表をするということで改めて自分たちのプロジェクトの問題を見つめ直せたとし、慶應大学の方の感想や意見を初めてしっかり聞くことができて、慶應の人たちから見た「弘前」のイメージや、イベントへのアドバイスを聞くことができた。

アドバイスとして、学生向けの企画を考えてみることで、全国からインターンのよ

うな形でメンバーを募ること、マルシェ後に挨拶に回るにいうことなどをいただいた。確かに弘前大学生だけでなく、弘前の地域活性化に興味のある学生を募集するのはいいと思った。

課題としては、自分たちは課題ばかり見つけて、対策をあまり考えてないと思った。こんなに大変ということはいくらでも言えるけれど、どうすればいいかについてあまり話し合えていないという問題が見えた。帰ってからまたみんなで話し合いたいと思う。

① 感想、展望など

発表をし終わった後に、「すごく大変だったんだね」ということを多くの人に言われた。確かに私の発表ではそれを強調して、どうすれば続けられるのだろうということを中心に話してしまったからそう思ったのだと思うけれど、「大変だった」ということだけを伝えたかったわけではなかったと、発表を終えてからそのことに気づき、少し悲しくなった。やはり大変だということを使うよりも、大変だったからこのようにしたい、だから手伝って欲しい、アドバイスが欲しいというスタンスで発表をすれば、もっと多くの意見などを聞けたのかなと思った。

これはきっとこのプロジェクトに限らず、他のことで壁に当たった時にも同じだと思った。大変な時こそ「大変だ」ということよりも、「手伝って」「アドバイスが欲しい」ということを周りの人にはいってほしいと思った。

3. その他の参加アトリエ（日時とアトリエ名も書く）／その感想

- ・日時：3/27(日)10:30～11:50
- ・アトリエタイトル：

Comment rendre les apprenants actif?

どのように学習者を能動的にさせるか

ここで驚きの体験をした。初めてフランス語が通じる、話せているという体験をした。実際に授業でやっていることを先生方が生徒としてみんなで模擬授業をするというものだったのだが、何も見ないで色んな人とフランス語で話すということをしたら、私も普通に聞いたり話したりすることができて、思わぬところで自分のフランス語に自信を持つことができた。

- ・日時：3/28(月)10:00～11:20
- ・アトリエタイトル：

異文化間教育と授業実践

Interculturel et pratiques en classe

初めて慶應義塾大学でどんなフランス語の授業を行っているかを知ることができた。そしてこんな授業が弘前大学にあったら絶対とっているなと思うものだった。(フランス語だけでなく、フランス社会や日本社会についてディスカッションするなど。)そして國枝先生の考え方も素敵だと思うことがいくつもあった。例えば『自分の体験から授業を始める、写真やイラストのクイズから始めると、どの大学とか関係なくみんなディスカッションできる。あまり大学のランクなど関係ない。』ということや、『寡黙な人が根暗でネガティ

ブな人とは限らない。だからディスカッションでも話しなよとは言わない。周りが話さない人もいることを理解すればいい。』ということなど。とても好感を持った。

そしてもう一つ、弘前大学が慶應大学の授業のレベルに全く届いていないということはないということがわかった。こんな授業があればいいと思ったが、よく考えると似たことを弘前大学でもやっていたし、「弘前×フランス」プロジェクトのようなものは慶應大学にはないと思うので。やはり入試の難易度のランクが大学の授業のランクには必ずしも一致しないし、それぞれの大学と、そこにいる先生方によって、どこの大学にも得意分野があり、尊敬することがあることが分かった。

・日時：3/28(月)14:00～15:20

・アトリエタイトル：

学生×教員：対話（エシアンジュ）フランス語学習と向き合う

ここでは先生と生徒が6人グループになり、生徒の困っていることに先生方がアドバイスをして、最後に全体で発表をするという活動を行った。グループワークで学生と先生がこんなに語り合う機会はなかなか無いので、新鮮で、とても有意義な時間を過ごせた。私のようにフランス留学を考えていて、勉強方法に悩んでいる学生がいることも初めて実感したし、それについての多くの先生からのアドバイスもとてもためになった。アウトプットのやり方をたくさん知ることができて、モチベーションも上がってとても良かった。



4. RPK2017の企画、教員・研究者・出版社との交流など、このたびの経験全体の感想(学んだこと、今後への生かし方、後輩にも経験させたいか、など含む)

今まで教員の集まりと言ったら、堅苦しくて空気の重い、真面目なものというイメージを持っていたし、この RPK もそうなのではないかと思っていた。けれど実際に来てみると、先生方は私服でニコニコしていて、自分たちのしていることに自信を持っている一方で不安なことや課題も多く抱えながら授業をしていることがわかった。どうすればもっといい授業にできるだろうということを先生方が一生懸命考えていたり、発表している光景に、学生だけでも親近感みたいなものを感じた。「教員」というイメージが今回の RPK で大きく変わったと思う。この2日間で、大学では経験できないことを経験できたし、とてもためになった。(上記のように先生方が考えてることが少し分かったこと、アウトプットのやり方や、自分のフランス語への自信、モチベーションが上がるなど。)

そして今回一番特徴的だったのが、自分の発表だけでなく、話を聴く側に回っても、発言する機会がとても多かったこと。私は2人以上になるとあまり発言しなくなることが多いのだが、この2日間で集団の中でも気負いすることなく話すことに少し慣れたと思う。私が学生として思った、自分では普通のことや、大したことないと思うことも、実は私にしか言えない感想であって、他の先生たちには驚きのことだった、という経験をこの2日間で何度もした。そのため、私が大したことないと思う感想も言ってみてもいいんだな、ということを知ることができた。これは多分今回に限らず、他の場面でも以外とそうだったのかもしれないと思ったので、これからはもう少し気軽に自分が思ったことを言ってみちゃおうと思った。

後輩へ伝えたいことといえば、せっかく出張費をいただいて4日間も大阪に行けるのだから、行くべきだということ。きっと来年度などは内容も変わって、感じることも全く違うものになるとは思いますが、とても濃い4日間になると思うからだ。そして、やはり慶應大学でなかったとしても、他の大学の人たちと来た方が絶対にいいと思う。RPKに参加するだけでなく、他大学の人たちは同じ発表を聞いてどんなことを思ったのか話し合うところ出来るし、空いた時間の交流などで仲良くなれるから。

5. 慶應義塾大学（國枝研究会）の学生との同宿や交流の感想

一番驚いたことは、0さんのおじさんの宿を見た時だった。大きくて、いかにも日本らしいお屋敷のような家で、部屋は畳、こたつ、押入れがあるようなところだった。そこで0さんがよくいたという書斎を見せてもらったのだが、そこには歴史、宗教、美術、漫画まで幅広いジャンルの本がびっしり天井まで積み上がっている棚が部屋に並び立っていた。こんな環境の中で過ごしていたことにとっても驚いたし、よく0さんが休憩時間に本を読んでいる理由も少しわかった気がした。私が想像もつかないような人生を送っている人がいることを改めて実感した瞬間だった。やはり育った環境は人に大きな影響を与えるのだなと思った。一人一人みんな濃い人生を送ってきているんだろうなと実感し、みんながどのような人生を送ってきたのかにとっても興味を持った。

さらに慶應大学のみんなと食事をしたり、一緒に夜まで話をしたりしたことで、大学の違いを超えて、仲良くなれたと感じた。今まで東京で慶應大学の人というと、頭良くて自分とは全く違う集団だと思っていたけれど、違う中にも同じ話題や似たような経験、むしろ相手が「すごい」と言ってくれるようなこともあると知り、「弘前大学と慶應大学は全然違う」という気持ちがなくなった。確かに東京の慶應大学の人は尊敬するところはたくさんあるけれど、だからと言って弘前大学に通っている自分が、大都市の大学の人よりも劣っているということはないと思えるようになった。もっと自信を持って色んな大学や色んな人と仲良くなりたいと思った。

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2016

@上田安子服飾専門学校一大阪

2017.3.27-28 参加報告書

産業情報コース 2年 高木 雄基

1. 発表事前準備

① 目標：

「弘前×フランス」プロジェクトを振り返るアトリエでは、今あるものから何かを削ることで、継続をテーマとした未来像の提示と、ロールモデルの提案がテーマであった。ただの報告とは違い、事業の本質を掴んだ上での未来像と発表の本質を内包するという、二重の意味での本質を事前に上野と議論を進めた。

② 成果／課題・改善点：

議論にじっくり時間をかけたただあって、簡潔明瞭であった。

事前の情報共有をしなかったことで、SFC組の様子がわからず、またアドバイスがなく、不安であった。

2. アトリエ発表

・日時：3/27(月)13:45～15:05

・アトリエタイトル：

学校をまつりの場に～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin :pour créer un lieu de formation et de rencontre



① 目標：

もう3ヶ月も前のことになってしまい、思い出すのに苦労するであろうから、なるべくイメージだけでも持っていこうと心がけた。

② プレゼン・発表内容：

発表した内容としては、自身のイベント運営の経験をもとにした、MG 学生スタッフの運営への参加の様子についてだ。身内の中でもやる気のあるスタッフ、そうでないスタッフがいることを自覚していたそうで、筆者がイベントを運営していたときも同様の体験をした。

3 大学のディスカッションを通じた交流では、SFC 組がファシリテーターとして

参加して、MG 組と弘前組はそれに乗っかるという構造であった。MG 組は他の大学それも共学のところとの交流に恐れを抱いており、弘前組も、ミッション系大学のイメージに怯えていたわけだが、それを中和したのが SFC 組であったというのは、間瀬先生がコメントして初めて意識した。3 ヶ月越しに振り返ってみても SFC 組の牽引力の高さに感嘆しなかった。

③ 成果／課題・改善点：

当日の発表で学生が期待通りのコメントを述べる事ができたかは疑問だが、MG の学生が考えている課題への提言は当日でも前日の打合せでも与えられたと思う。男性の来場者を増やしたい意図については不明だが、外部の視点で男性客を無造作に増やさない方がいいという結論に達したことが、何よりの成果だと筆者は考えている。

④ 感想、展望など

やはり当事者の意見、つまりこれから主体を握っていくであろう、学生スタッフも 4 者間の議論に参加していただいたほうが、白熱したと思う。次回のパワーアップした CM にもぜひ参加したいところだ。

・日時：3/27(月)15:20～16:40

・アトリエタイトル：

2016 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel

《Hirosaki×France》



① 目標：

本質を理解してもらい、これまでの成果報告からは見えなかった真実を見通した上で、学生主体の団体がどこまでできるかを知ってもらうこと。また、別の知見から、ぜひ無理のない運営への糸口をアドバイスしてもらうこと。

② プレゼン・発表内容：

上野から事業と学生のリアルを発表した。年間のスケジュールと、学生が授業やサークル、アルバイトの時間を縫って活動していること、具体的にどこで何を、誰に向かってしているのかという方法の 3 点で発表。その次に筆者より、現状を理解してもらってから、何が必要なのかを絞って説明。その点に向かって残していくべきことと、新展開が必要なことを発表して、次期事業ビジョンとして締めくくった。

③ 成果／課題・改善点：

二重の本質をじっくり検討しただけあって、的外れな回答はなかった。今回は初めて、学生の本音にメスを入れたことで、真実味と現実味を訴えかけることには成功したが、他社へのロールモデルの提案とまではいかなかった。

ひとまず、グローバル・アクションのメンバーで拡大した議論を展開して、ビジョンの共有と具体案の策定を進めたい。これまでは、1 から 10 をその通りこなしていたが、1 から 10 を議論して熟考することで、本当にやるべきことをないがしろにしない取り組みが必要であろう。

④ 感想、展望など

SFC 組が考えた本質は理解したが、そこまでの道のりについては少々理解まで至らなかった。聴衆からは思いの外、否定的あるいは消極的な意見はなかった代わりに、インターンシップ化するとか COC 事業に組み込むといった、全く新しい方法を教授してもらった。これについては、本質を揺るがすことなので、慎重な議論は必要だろうが、間違いなくメンバーに新たな思考をもたらすだろう。

3. その他の参加アトリエ（日時とアトリエ名も書く）／その感想

・日時：3/27(月)10:30～11:50

・アトリエタイトル：

Comment rendre les apprenants actif?

どのように学習者を能動的にさせるか

高校でのフランス語教育として、実践している内容をもとに聴衆にも体験してもらうという時間であった。まずは、教科書の会話文のビデオを視聴して、話してみるところから始まる。期末ごとに、それまでの学習内容のまとめとして、ゲーム形式のワークショップを実施するというのが、発表者の教育方法らしい。高校生にこそ、このぐらいのワークショップ形式の授業が良いのだろうが、受験を意識したシラバスでは第 2 外国語教育は撤廃されていくのが、現実だと嘆いていたことが何よりも印象的であった。

・日時：3/28(火)10:00～11:20

・アトリエタイトル：

フランス語教育におけるフランコフォニーの課題と展望：学生アンケートをもとに。

Enjeux et impact de la francophonie pour l'enseignement du français : réflexion sur les résultats d'enquêtes auprès des étudiants

筑波大学のフランス語履修者をモデルに、履修の動機とフランス語へのイメージの変化を 2 年に渡って調査した。報告によると、筑波大では、おおよそ文系学類と理系学類とでクラス分けされていて、それぞれでまた授業の展開も異なる。調査方法としては、試験の回答用紙にアンケート記入欄を設けて、回答者のうち数名には聞き取り調査も行った。フランス語へのイメージは、上品・格調高い、かっこいい、発音がきれい・難しいなどといった項目が多かった。フランコフォニーと関連したことで言うと、上品とか格調高いというイメージは従来から教員が抱くイメージが押し付けられているためではないかと指摘し、また自由な言語学習においては、それは肯定されるべきではないと批判した。弘前大と筑

波大とで学生の意識に違いがあることも一部分で認められた。

- ・日時：3/28(火) 11:35～12:55

- ・アトリエタイトル：

上智大学言語教育研究センターにおける初習 5 言語により Language Exchange の試み～フランス語ケースの分析～

Échange plurilinguistique par le Centre d'études et de recherches des langues à Sophia ～le cas du français～

上智大学での自発的外国語学習を促す取り組みであり、言語教育にも特化した大学ならではのデータもうかがい知れた。例えば、Language Exchange で取り扱っている言語はスペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語であるが、言語ごとの学習者数と、Language Exchange への参加具合を割合で示すと、言語ごとにばらつきが見られた。また、複数回に渡るリピート率も同様の結果がでていたが、フランス語だけ前期よりも後期のほうがリピート率の上昇を示し、今後未参加の学生をどれだけ巻き込むかと、学生主体に切り替えていく方法を検討するようだ。弘前大にも国際教育センターが常設であるが、積極的な宣伝がまだできていないかもしれない。

- ・日時：3/28(火) 14:00～15:20

- ・アトリエタイトル：

学生×教員：対話（エシアンジュ）フランス語学習と向き合う

グループワークが大部分で、グループ内の教員は直接苦難の相談と、学生からの提案を受けた。筆者が参加したグループでは一貫して、クラスごとに授業進度にばらつきがあり、学生がどこまで学習に積極的なのかを知りたがっていた。参加していた別の学生は、保健学が専門でフランス語を専門に学習する必要性はそれほどないのだが、ぜひ自身の専門にフランス語圏の人からの知見を取り入れたいと、意気込みを語った。これに関しては、グループ内の教員も同じくフランス語を学ぶ筆者も、大いに感心していた。

- ・日時：3/28(火) 15:35～16:55

- ・アトリエタイトル：

教室におけるアクティヴ・リーディング

Le lecture active en classe

日本語文章のアクティヴ・リーディングを構成した上で、それがフランス語教育にも活かさないかという趣旨の発表であった。面白かったのは、その方法論よりかは、そもそも学生のアクティヴとは？という議論だった。しかもラーニングではなく、リーディングに的を絞っていたことに、特別な意味を感じた。

4. RPK2017 の企画、教員・研究者・出版社との交流など、このたびの経験全体の感想 (学んだこと、今後への生かし方、後輩にも経験させたいか、など含む)

フランス語がほとんど話せないことから肩身の狭い思いをしたが、ランコントルを体験できる場となったことは間違いない。どの教員も言語教育に熱意を持っていることが伺い知れて、普通の学会とは大きく違うと感じた。



5. 慶應義塾大学（國枝研究会）の学生との同宿や交流の感想

間瀬先生のコメントにもあったとおり、國枝研の学生が普段から如何に真剣に議論しているかを刮目した。ただ議論ができるだけではなく、すべての学生がまんべんなく幅広く、アクティビティに参加できることから、自己の目的達成基準を高めたいと感じた4日間となった。

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2017

@上田安子服飾専門学校一大阪

2017.3.27-28 参加報告書

総合政策学部 3年 野口 実里

1. 発表事前準備

① 目標：

2 回のフィールドワークを通じて感じたことをまとめ次回に繋げられるプレゼンを行う。

② 成果／課題・改善点：

ふたつのアトリエでの発表で自分の率直な感想を報告できた。次回は今回発表した感想を踏まえて分析や考察まで繋げられたらと思う。

2. アトリエ発表

・日時：3/27(月)13:45～15:05

・アトリエタイトル：

学校をまつりの場に～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin :pour créer un lieu de formation et de rencontre



① 目標：

自分が現地で感じたことをそのまま来場者に伝える。

外部からの視点でどのようにイベントに参加したかを伝える。

② プレゼン・発表内容：

クリスマスマーケットの外部からの参加者としての感想の発表

③ 成果／課題・改善点：

パネルディスカッション形式の発表で、学生たちの率直な感想と間瀬先生の意見を交わしあえる点が良かったと思う。

④ 感想、展望など

慶應大・弘前大・宮城学院大の 3 つの視点でイベントを振り返ることができて非常に有意義だったと思う。

・日時：3/27(月)15:20～16:40

・アトリエタイトル：

2016年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel

《Hirosaki×France》



① 目標：

自分が現地で感じたことをそのまま来場者に伝える。

外部からの視点でどのようにイベントに参加したかを伝える。

② プレゼン・発表内容：

外部からのマルシェ参加の感想

③ 成果／課題・改善点：

率直な感想をシェアすることができたと思う。しかし今回のプレゼンはあくまで感想のみの発表となったため、次回また参加する機会があれば分析まで繋げたい。

④ 感想、展望など

周りの先生方の反応もあたたかく、発表しやすい雰囲気だった。また弘前大学の発表を聞き、どのようにイベントが運営されていたのか裏側も知れて良かった。

4. その他の参加アトリエ（日時とアトリエ名も書く）／その感想

・日時：3/27(日)10:30～11:50

・アトリエタイトル：

「アクティブ」とはなにか？：理論と実践

Qu'est-ce que «actif»? : Théorie et pratique

一言でアクティブラーニングと言っても様々なものがあり、様々なアプローチがあると感じた。単に発言を促すのではなく、学習者の深い理解や学習に対するモチベーションを促す工夫が重要だと思った。

・日時：3/28(月)10:00～11:20

・アトリエタイトル：

異文化間教育と授業実践

Interculturel et pratiques en classe

異文化教育は自分の知らないことや異なる世界を知るきっかけになり、偏見をなくし寛容な心を育むための重要な機能を持つと感じた。そのためには教員が教える形式ではなく、学習者が自ら異文化との相違や類似に気づき考えられるような授業形式が求められると実感した。

- ・日時：3/28(火) 11:35～12:55

- ・アトリエタイトル：

上智大学言語教育研究センターにおける初習 5 言語による Language exchange
の試み～フランス語ケースの分析～

Échange plurilinguistique par le Centre d'études et de recherches des langues à
Sophia ~le cas du français~

外国語学習者が実際にその言語を用いてネイティブと話せる機会は少ない。ゆえに学校にそのような環境を整備することは学習の振り返りや継続の大きなきっかけになるのではないかと思う。慶應 SFC でもそのような機会があればと思う。

- ・日時：3/28(火) 15:35～16:55

- ・アトリエタイトル：

教室におけるアクティヴ・リーディング

La lecture active en classe

まず日本語でのアクティヴリーディングを実施してからフランス語でも行うという手法がとても興味深かった。母語と外国語で全く同じ考え方で学習を進めていくことは難しいように感じていたが、実際は似ている手法でも可能なように感じた。読解を深い理解につなげるために、教員がどのようなヒントを与えるかも重要になるような印象を受けた。アクティヴと言っても完全に学習者任せになってはならないと感じた。

5. RPK2017 の企画、教員・研究者・出版社との交流など、このたびの経験全体の感想 (学んだこと、今後への生かし方、後輩にも経験させたいか、など含む)

初めて教員の方々と交流することができて、授業の裏側にある工夫や狙い、努力を



実感することができた。そして教えるということの難しさを改めて感じた。これまで授業を教員目線で分析して考えたことはなかったということに気がついた。同じ授業でも視点を変えれば違うように捉えられるということ改めて実感した。学習は学習者が行うことであるが、教員がどのように関わるかで学習者の学びの深さに違いが出てくるのだろうということを各アトリエに参加して感じた。また自分の発表に関しては、

フィールドワークを通じて感じたことを振り返り、今後経験としてどのように生かしていくのかを考えるいい機会となったと思う。

6. 弘前大学の学生との同宿や交流の感想



弘前大学の学生との交流は今回で3回目だったが、これまでよりも共に行動する時間が多かったこともあり、互いについてゆっくり話す機会も多かった。彼らと過ごした時間はとても充実していた。今振り返ると過去2回の交流では以前は『慶應義塾大学の学生の一人』、『弘前大学の学生の一人』のような肩書きの中で交流していたように感じる。しかし今回はそれぞれが一個人として向き合い共に時間を過ごしていたと思う。どういう研究分野に興味があるのか、これからどのようなことに挑戦したいのかなど話せて有意義な時間を過ごせた。それは互いを個として向き合っていたから多くの話をできたのか、その逆なのかはわからない。しかしながら同じ相手でも関わり方は変わったように感じた。人と人のコミュニケーションにまた興味を抱くきっかけとなった。

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2017

@上田安子服飾専門学校—大阪

2017.3.27-28 参加報告書

環境情報学部 4年 折井 伸之輔

1. 発表事前準備

① 目標：

クリスマスマーケットの振り返りを通してメンバーと発表の方針と内容を共有し役割分担を行うこと。また、当日の大まかな流れを確認すること。

② 成果／課題・改善点：

メンバー(学生)が各々一番よく記憶しているシーンを担当して言及するように心がけたことがコメントを充実させていたように感じた。

2. アトリエ発表

・日時：3/27(月)13:45～15:05

・アトリエタイトル：

学校をまつりの場に～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin :pour créer un lieu de formation et de



rencontre

① 目標：

クリスマスマーケットの背景や当日の状況、準備や片付けの様子を参加者側と主催側両方の観点から指摘すること。また、学生だからこそ感じたことを表現することでクリスマスマーケットというイベントの様子を多角的に捉えてもらうこと。

② プレゼン・発表内容：

当日の状況、準備や片付けの様子

③ 成果／課題・改善点：

メンバーが各自の視点からイベントを振り返り、語ったことでアトリエ参加者

にとって分かりやすい発表だったのではないだろうか。

④ 感想、展望など

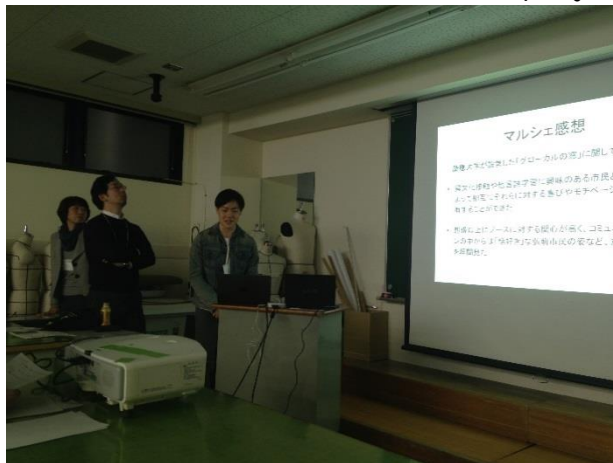
経験を振り返り、共有することで活動を大きな文脈に位置付ける機会になった。

・日時：3/27(月)15:20～16:40

・アトリエタイトル：

2016 年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel



《Hiroasaki×France》

① 目標：

弘前×フランスプロジェクトに関する活動一連の流れを説明するとともに、学生、都市、外部者などの属性を持ったものとしての参加によって得られた経験を報告すること。

② プレゼン・発表内容：

研究会における事前ディスカッションや当日の活動などの様子を学生目線で表現することができた。

③ 成果／課題・改善点：

時間の制限もあり、経験やそこから得た学びを短時間にまとめることが難しかった。

④ 感想、展望など

プロジェクトを実現するまでの弘前大学の学生の努力がとても印象的だった。予算申請のための審査会でのプレゼンテーションなど、これほどの苦労があったとは知らず、驚いた。

3. その他の参加アトリエ（日時とアトリエ名も書く）／その感想

・日時：3/27(日)10:30～11:50

・アトリエタイトル：

「アクティブ」とはなにか？：理論と実践

Qu'est-ce que «actif»? : Théorie et pratique

アクティブには様々な定義があったように感じた。また、「アクティブであることを求める」ことに疑問を呈したコメントが非常に印象的だった。

4. RPK2017 の企画、教員・研究者・出版社との交流など、このたびの経験全体の感想
(学んだこと、今後への生かし方、後輩にも経験させたいか、など含む)

学習方法や学びのあり方に関する議論に実際に参加できたことは非常に良い経験になった。また、様々な方面の方々と交流できたことで出会いが多く生まれた。



5. 弘前大学の学生との同宿や交流の感想

何度も同じプロジェクトで会っているうちに親密度が増してきたように感じる。今後、前回のように他大学を混ぜてディスカッションをしても良い雰囲気で行えるのではないだろうか。

RENCONTRES PEDAGOGIQUES DU KANSAI2017

@上田安子服飾専門学校一大阪

2017.3.27-28 参加報告書

政策・メディア研究科 修士課程2年 藤谷 悠

1. 発表事前準備

① 目標：

学部生二人にはフィールドワークで体験したことを個人の視点から自由に咀嚼して言葉にしてもらうことにしていたため、自分はそれらを包括するようなまとめとしての概念的考察を行うことを意識した。

② 成果／課題・改善点：

熊野先生との直前のすり合わせで、SFCのフィールドワークにそれぞれが求めているもの・求められていたものという点において、若干の相違があったことがわかったが、それも話し合いの中で今後同様のことを行う場合の課題としてブラッシュアップすることが出来た。

2. アトリエ発表

・日時：3/27(月)13:45～15:05

・アトリエタイトル：

学校をまつりの場に～宮城学院クリスマスマーケット企画運営～

Le Marché de Noël de Miyagi Gakuin :pour créer un lieu de formation et de rencontre

① 目標：

事前打ち合わせでの質問パートの割り当ての流れに沿って上手く答えられるように意識した。

② プレゼン・発表内容：

発表では間瀬先生からの質問に応答するという役割だったが、「その時自分はど
う思っていたか」を率直に言語化することを心がけた。教員や大学目線からのイ
ベントの意図説明に対して、実際に参加した学生は何を感じていたのかという視
点を提示することで、発表に広がりを持たせることが出来たのだろう。

③ 成果／課題・改善点：

それぞれの学生が感じていたことを聞きながら当時のことを振り返る機会とも
なり、発表に参加すること自体が宮城でのフィールドワークという学習体験を反
復するための装置になっていたように思う。発表という形にすることで、曖昧だ
ったものを落とし込めたのではないかと。課題を挙げるとすれば、宮城学院の学
生たちが参加出来れば、より多角的な語りとなったのではないかとはいえ
るが、手紙によってある程度その点はクリアされていたとも思う。

④ 感想、展望など

今回の間瀬先生の発表や、そこで出た慶應と弘前大学の学生たちの感想が、次回以降の本イベントにどの程度活かされていくのか気になる。可能であればまた参加してみたい。

・日時：3/27(月)15:20～16:40

・アトリエタイトル：

2016年度「弘前×フランス」プロジェクトを振り返る

Réflexion sur notre défi 2016: projet plurilinguistique et pluriculturel



《Hiroasaki×France》

① 目標：

慶應が行ったフィールドワークがどのような意義を持っているかを概説することを目標としていた。

② プレゼン・発表内容：

個人的には昨年度に行った RPK での発表の続編のようなものとして位置付けていたため、今年度も広く人文学の知見を用いて、実践として行われたフィールドワークの、学びとしての意味を解釈する内容に仕上げた。

③ 成果／課題・改善点：

言語教育とは分野の違う領域からの考察となったが、それが言語教育（およびそれと関連して行われるフィールドワーク）とも結びつく考えであるかを意識した結果、その意図に適したスライドを作ることが出来たと思う。ただ、スライドの枚数が多くなったため、発表時間内に収めるのに苦労した。

④ 感想、展望など

前日打ち合わせでも熊野先生と話したが、今回に関しては、客観的に「弘前×フランス」プロジェクトそれ自体を観察して分析するという目的を強く意識してフィールドワークを行っていた訳ではなかったため、発表ではそうした視点からの考察を行うことは出来なかった。飽くまでも、慶應側として準備していた、現地の人々の実際の様子や弘前大学の学生たちとの交流に関する考察に主眼が置かれており、慶應の発表もその点に比重を置くこととなった。次回以降の機会がもしあ

れば、(なおかつ何らかの発表をすることが決まっているのであれば) 事前に発表に向けて双方でそれぞれの目的意識を統一し、連動性のあるフィールドワークにすることが望ましいのではないかと感じた。

3. その他の参加アトリエ (日時とアトリエ名も書く) / その感想

- ・ 日時 : 3/27(日) 10 : 30 ~ 11 : 50
- ・ アトリエタイトル :
「アクティブ」とはなにか? : 理論と実践
Qu'est-ce que «actif»? : Théorie et pratique

福島先生のグループによる本アトリエでは、福島先生による理論的な概説から、実践として行われたアクティブラーニングの活動例が紹介された。それらを見ながら、参加者は小グループを組んでその中で与えられたテーマを元に議論を行った。最後の質疑応答で、僕が参加したグループからの質問として、「アクティブラーニングにおける評価は客観的な指標を立てて行うことが可能なのか」という問いかけに対する福島先生のお答えである、「アクティブラーニングは思想としての意義が重要なのであり、実際に行われた活動に関しては、過程を見ることはあっても、結果それ自体を評価することはしない」という主旨の回答が印象に残っている。そうは言うものの、実際にアクティブラーニングが授業内に取り込まれた場合、成績評価をつけなければいけない訳であり、そこに評価される側の納得が得られるような、「理性的な基準づくり」がどのように行われているのかという点に関する疑問は残った。

4. RPK2017 の企画、教員・研究者・出版社との交流など、このたびの経験全体の感想 (学んだこと、今後への生かし方、後輩にも経験させたいか、など含む)

今回の RPK での各アトリエは、自分が行ってきた研究や活動実践と連なる発表も多く、それらと照らし合わせながら参加することが出来たのは有意義であったように思う。発表に向けた一連の取り組みは、教員の方々や、他大学である弘前大学の学生たちとの協働は、慶應の学生たちにとっても得難い経験になっていると思うので、今後こうした機会に参加していくことを勧めたい。

5. 弘前大学の学生との同宿や交流の感想



これまで三度の弘前への訪問を通じて、日本の中に自分の人生に連なる土地がもう一つ出来たかのような感覚があります。そう思えるのも、弘前大学の学生や熊野先生、弘前の人々との、鮮やかな交流体験があったからです。そういう意味で、もはや僕は弘前へは観光客としては訪問出来ないですし、弘前の皆様とは、もう「弱いつながり」ではなくなったのかもしれませんが、もう見知らぬ土地でも、一期一会の人々でもなくなった後のつながりというものを、これからも時間をかけて楽し

めるような関係になれば、それが何よりの喜びです。少しずつでも、末長くお互いのことを分かち合っていきましょう。またどこかで再会出来ることを願っています。